長崎県地学会誌　第39・40号（1984）

長崎大水害を体験して

今村　宏（精道学園）

当時，私は長崎大学教育学部地学教室の学生だった。住所は長崎市西南部の小瀬戸町だったが，23日の雨の降り始めた頃（午後6時頃）は，現在務めている精道学園（長崎市三川町）にいた。「この夕立ちがおさまってから出発して，家に帰ろう」という心積りだったが，それから次第に雨は強くなり，一晩，学校の宿舎に泊まることとなった。

8時頃，これはただの雨ではないということで，学校の先生たちといっしょに，学校周辺を点検するため，雨がっぱを羽織って雨の中に出ていった。一歩外に出ると叩きつけるような雨。市道の方に出ると（そこは急勾配10％くらい），泥水が川のようになって三川町の方に流れ下っていた。その道を下って，ちょうど精道学園の下にあたる三川町民家の辺りにやって来た。ほとんどの家は，谷にそってはい上がるように建っているので，その谷づたいに水が流れこみ，溝なども用をなさなくなって，家の玄関や庭などに水が入って，どうしようもない状態だった。

その時，疑問に感じたのは，三川町はそれ自体，海抜100mにあるのに，どうしてこんな家までが水びたしになるのかという事である。今になって考えれば，あのような大雨だからという事で説明がつくかも知れないが，あの時は，そのような経験が，私にも，また周りの人々にもなかったのである。

答えはこうであろう。普通では水浸しになるような所でない三川町の，しかも三川の川から離れた家は，大概は山沿いの山と山との間，つまり小さな谷に沿ってはい上がるように建っているので，あの日のように急激に雨が降ると，普段，下水処理くらいに使っている溝では，山々が受けた水の流れを受けきれずにあふれた。そして，そのあふれた水は，人の通る道を川となって流れ，家の庭や床下にも入り，出る水より入る水の量が多いので床下の浸水にもなってしまった。とにかく，全てを大雨のせいにしてしまえばそれまでであるが，逆に考えると，それくらい大変な大雨だったのだと言える。

そのような学校周辺の家々を見たり，あるいは，水はけをよくするのを手伝ったりしながら，9時頃もと来た道をたどって学校へ戻っていった。しかし，この時，またしても驚かされた。市道の真中に，直径4mもあろう程の岩が，脇の露頭から木もろとも落ちてきて，でんと座っていたのである。つい20分程先に帰って行った知人が，もしやこの下にいるのではと思い，その人の名を呼んだり，血が流れていないかなどと調べてから，学校に帰った。

宿舎に帰り，見た事，感じた事などを先輩の先生に報告していた時，一つ気掛かりな事を思い出してしまった。ちょうど，数日前から長崎大学の気象観測露場の自記雨量計が故障していたのである。外に出て，上記のような状況を見た後，普通の雨ではないと感じていたので，長崎大学の自記が動いていないと困ると思った。「長崎大学の雨量計が壊れているので，観測に行って来ます」とその先生に言うと，「ばかもん……」と一喝されてしまった。

実際，その頃，三川町から長崎大学までの間には，氾濫した浦上川があり，人はおろか，車さえも流されているという状態だったので，三川町にじっとしていたことは，確かに賢明であったのである。